

驚くべき 「変えられない」時間の長さ

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず
大石 久和



われわれ日本人は「変わり行くことは喜んで受け入れるし、むしろその変化を大切にもし慈しんでもいる」のだが、「変えることは断固として拒否する」という性癖を持っている。このことは、イギリス人の経済評論家デービッド・アトキンソン氏が、「これだけの危機に直面しても、自ら変わろうとしないのは普通の人間の感覚では理解できません。異常以外の何ものでもありません。」と驚愕しているほどなのである。

最近、筆者がよく紹介している「驚愕級の変えられなさ」は、

- ①憲法の改正ができないこと・約80年間
 - ②原子力発電所の新設・存置について正面から向き合えないこと・約10年間と約60年間
 - ③財政再建至上主義から脱却できないこと・約30年間
 - ④民意を反映できない学級崩壊級の国会が続いているのに、衆議院の小選挙区比例代表制導入への反省がないこと・約30年間
- という長さである。これでは、アトキンソン氏がのけぞるほど驚くのも当然なのだ。

こうした無変更指向の結果、世界の中で唯一取り残されるように「国民の貧困化」、「経済の低成長化」、「科学技術の競争力の低下」が進行しているのに、まだ間違い続けてきた改革論や

規制緩和論が堂々と横行しているという知能停止ぶりなのである。

これは、最近のわれわれの実態なのだが、これには民族の歴史が絡んでいるから容易ではないのだ。日本人は無常観を持つと言われる。これは冒頭に述べた「変わりゆくことを受け入れる」とほぼ同意味である。

方丈記は、冒頭にうたかた（＝泡沫）がつつぎと水面に浮かんで消えていく様を「世の中とは変わりゆくものだ、いつまでも形を保つものはない、すべての存在はむなしなものなのだ」と詠んで、常なるものはないというのだ。

しかし、日本人のこの感覚は地震や洪水、土砂崩れなどの自然災害を繰り返し経験してきた結果、身につけたものなのであって、「形あるものは、いつまでもその姿をとどめるものではない」との感覚なのである。

つまり、われわれ日本人は、変わりゆくことを嘆いていても仕方がない、それを受け入れて生きていくしかない「形の変化受容民」となったのである。これは、もちろん西欧との比較で述べている。

例えば、パリは有史以来大地震を受けたことがないし、セーヌ川の氾濫もすべての建物や人びとを一瞬にして押し流すようなすさまじいも

のではない。セーヌのような大河川になると、何日もかけてゆっくりと水位が上昇するというタイプの洪水となる。

従って、人間が造ったパリという街は「人間が改造しない限り、そのままの形で存在し続ける」のである。つまり、彼らは「《もの》が変わらないことを大切にする」という文化を身につけ、1800年代に改造された現在のパリの景観を守り抜こうとするのだ。

ところが、われわれ日本人は、東京が大きく変貌していくことを何ら厭わないのである。何度も大地震を経験して、変わることを嘆いても仕方がない性癖を身につけてしまったからである。

これが、「しかし、しかし」と続くのだ。なるほど西欧では大災害ではしなかったが、日本人の大量死がほとんど大災害死であった歴史がある。一方、彼らは度重なる異国民や異民族との紛争で大量死していったのだ。だからちょうどその反対に、長い歴史を持つ世界の中では「日本人だけが、大規模な紛争による膨大な死の経験をまったくしていない」のである。

朝鮮半島からイギリスに至るユーラシア大陸では、すべての人びと、すべての民族が経験したというのに「アジアの離れ小島にいた日本人だけが大量虐殺の経験を持たない」のだ。

紛争死の世界では、頻繁な作戦変更は必然だ。こちらもそうだが、相手も当方の作戦を合戦ごとに学習するからだ。国際的なスポーツを見ても頻繁にルールの変更があるのも、何も日本いじめをやっているのではなく、状況の変化があれば規則の変更は当たり前と考えているからなのだ。

奈良時代など古い時代に作られた仏像や仏閣

は、完成時には金ぴかで極彩色だったはず（その痕跡がかすかに残っていることが多い）なのに、日本では韓国などのように常に再塗装を繰り返したりはしていない。古びていくのを放置しているのだ。

これはやや思考が必要なのだが、この再塗装の否定は「ルール変更拒否」がもたらしめているのではなく、不思議な言い方のようだが、「時間を経て塗装が剥がれ古びていく＝昔とは異なる新しい姿になっていくこと」を喜び、楽しんでいる姿なのだ。

伊勢神宮の式年遷宮のように、「ものが新しくなること」に新たな神威を感じる日本人だが、ちょうどまったくその逆にルールなどを新しくすることには、強烈な拒否感を持つのも日本人なのである。奇妙に感じるのだが「物が新しくなってしまう」ことを必然的に受け入れざるを得ないわれわれは、「わざわざ自分でやり方＝方法を新しくするのは絶対拒否」のである。

1945年からの80年前、戦後のわれわれが一度も憲法を改正しなかった年月だが、それはなんと悲しいことに、江戸幕府が第二次長州征伐を命じた年・1865年なのである。長州征伐の時代から先の大戦終了時まで、日本の、日本人の価値観が変わらなかったなどということがあつたらうか。

しかし、日本の憲法学者は「この80年は、基本法を改正しなければならないような価値観の変化はなかった」と言っているのだ。彼らは毎日法学部の憲法学教室に出て、何をして過ごしているのだろう。